

宝物をありがとう

沖縄県
沖縄市立美東小学校 二年

砂川 正夢

ぼくがまだ赤ちゃんのたまたまこで、お母さんのおなかの中に入るところから、お母さんは、ぼくに絵本を読んでいたそうです。そのころの事は、もちろんおぼえていませんが、ぼくがうまれてからも今日までずっと絵本を読んできています。

赤ちゃんのころのぼくのお気に入りの絵本は、エリック・カールさんの「はらぺこあおむし」でした。自分でページをめくっては、青虫みたいに絵本をかじったりして、ボロボロになるまで何度もくり返し、くり返し楽しそうに読んでいたと書いてありました。

二才になったぼくは、一人で「もったいないばあさん」の絵本を最初から最後まで、全部読んでみんなをおどろかせたりしたそうです。そのノートを初めて見せてもらった時、ぼくは、とてもうれしい気持ちになりむねのおくの方がジーンと熱くなりました。

ぼくの家では、よるねむる前に、三十分間「絵本タイム」の時間があります。

お母さんが絵本を読んでいるうちにいつの間にかぼくのまぶたは、おもりがついたみたいだんだん重くなつてしまいます。

お母さんの声の子守うたのように聞こえてくるのです。

お母さんは、いつもぼくにこう言います。「どんなに大切なおもちゃや高かな時計も、なくしてしまったりこわれてしまうけれど本は、一度読んだら正夢の心の奥にずっと残って絶対になくならないんだよ。本がくれる財さんは、一生消えない宝物なんだよ。」「ぼくは宝物を持っているのかな」と思いました。

ぼくが小学校へ入学してからお母さんは、読み聞かせボランティア「ふくろうの会」に入つて毎週木曜日には、学校へ絵本を読みに来てくれます。一年生から六年生までみんないろいろな絵本を読んできます。木曜日の朝はとても楽しんでいます。

今のぼくが本を大好きなのは、きつとお母さんが赤ちゃんのころから毎日、毎日ぼくのために絵本を読み聞かせてくれたからだと感謝しています。

読みたいときにいつでもぼくのそばには、本があるので幸せだなあと 생각합니다。

たくさんのお宝物を、ぼくにあたえてくれたお母さん。ありがとう。